

台湾の清国治下にあることおよそ二百年、その間常に土民の匪乱各地に絶ゆることなし。いまそのよりてきたるところを探究するに、遠くは西班牙（スペイン）および和蘭（オランダ）人の占拠あり。また明清の変乱より鄭成功の割拠に至り、あるいは台湾沿海の剽盜掠奪、あるいは漢蕃人耕地侵掠の争鬪、あるいは閩粵人（※福建人・広東人）の分類械闘（※十八世紀から十九世紀にかけて台湾で起こった族群間の武力衝突のこと）等、常に焚掠流血、もって生命財産を擁護し来たれる習慣より、子々孫々、不知不識の間、自然に凶險殺伐なる性をなし、これに加え人民の多くは頑冥不靈（※かたくなでおろか）・怠惰淫逸にして、また射幸心に富み、かつ迷信深く、よく荒唐無稽の流言蜚語を信ず。しかるに清国の有司、多くは曠職（※職務の責任を尽くさないこと）・貪婪・収斂苛虐、これもつばらとなせしをもって、人民はその圧迫に耐えず常に怨嗟の声を絶たず。その声集まりてついに一団となり、乱をなすに到れるものなり。そうしてなお我が改隸以後、二三の小匪乱を出したるは、これすなわち為政者の非なるにあらずして、多少かの異人種的敵愾心を含めると、およびその首謀者がほしいままに私囊を肥やさんがため、無知蒙昧たる土民を甘言あるいは迷信を利用し、煽動糾合し事をなせしに過ぎず。以下清国治下以来、今に至る間の匪乱の重なるものを掲げて参考に資す。

第一節～第十四節 【省略】

第十五節 林火旺・陳秋菊 その他

台湾接受後台湾鎮定の名を受けたる故北白川宮殿下は明治二十八年五月三十一日近衛師団を率いて基隆三貂角（サンチアゴ）より南下し、乃木中將は第二師団を率いて南部枋寮より、また第二師団混成第四旅団は布袋嘴（※現在の台南市安平区）より上陸し、皇軍破竹の勢をもって各地に敵軍をやぶり、堂々として台南城に入る。これより先北部の賊主唐景松は基隆より、淡水を経て福州に、南部の匪魁劉永福は安平より、ひそかに英国船に搭乗して厦門に走り、その部下散逸して影を認めざるに至り、ここに全く台湾征討終わる。しかりといえどもなお不逞の民各地に出没し、官兵に抵抗するものすこぶる多し。すなわち宜蘭には林火旺・林少花・林朝俊、台北には簡大獅・陳秋菊・林清秀・徐祿・鄭文流、中部には柯鉄・張路赤・頼福来・黄才、嘉義には黄国鎮・黄茂才、阿緱には林少猫等いずれも部下数千人を率いて横行闊歩し、隠然たる王公の觀あり。その他小匪者首小群に至りてはほとんど枚挙にいとまあらず。明治二十八年より明治三十四年土匪投降策行わるまでにおいて、土匪の大衆台北を襲うこと二回、台中を襲うこと二回、その他各所の守備隊・弁務所・支庁・憲兵屯所を襲撃すること五十数回、その他巡查派出所襲撃、または道途における遭遇衝突戦、枚挙にいとまあらず。この間土匪を捕らえる、八千三十人、その他来襲および遭遇戦に撃殺せしものその数を知らず。そうして明治三十四年児玉総督土匪投降策を施し、各地の匪徒を帰順せしめ、ここに始めて全台安靖を得たり。

第十六節 蔡清琳 ※北埔事件の首謀者

蔡清琳は新竹月眉庄のものにして、奸詐よく人を欺く、獄に入ること前後二回、しかれども改悛の状なく、淫逸遊惰常に正業に就かず、煽動欺瞞不正の行為をもって衣食す。あるとき帰順蕃人を瞞着し、新竹九州庵酌婦 諸岡とし（※氏名）なるものを落籍せしめ、自らこれを横奪して妾となすなど、その他不正の行為挙げるにいとまあらず。これがため新竹庁においては公安を害するものなりしとなし、度々嚴重なる戒告を加えたり。これがため漸次衣食に窮するに至り、官憲に反抗する念を嵩（かさ）む。時あたかも大崙崙蕃討伐のため隘勇（※台湾住民による兵士）を出向せんとするも隘勇等恐怖して出向を忌避す。清琳これを聞き機置くべしとなし、北埔蕃界に至り、しきりに流言を放ちていわく、「予は連合複中興總裁に任ぜらる。日ならずして支那の大兵渡台し新竹を陥落す。この際参加せるものは功に応じて栄職および多額の賞金を得べし」と。隘勇および付近の土民

これを信ず。清琳すなわちその隘勇および土民を率い、北埔蕃界の隘勇分遣所および派出所等五ヶ所を襲撃し、山を下って北埔支庁に入り、支庁長渡邊亀作および警部補・巡査・郵便脚夫等を惨殺す。この報を聞き歩兵一中隊・警官練習生百二十名および警察官吏を急派し、一挙にして北埔および隘勇線を回復し、匪徒を追撃して八十一名を殺戮し、九名を捕う。匪首蔡清琳は与党蕃人タイタローの家に潜したるも、清琳に欺かれたるを怒り、該蕃人のために殺害せられたり。この時毒手に倒れたるもの支庁長・郵便局長・警部補六・巡査十三・巡査補一・郵便脚夫一・家族二十二・土民十五、ほか負傷者六名にして該付近の内地人はほとんど全滅せられたるものなり。

第十七節 劉乾および林啓禎 ※林圯埔事件の首謀者

劉乾は南投県沙連堡羌仔寮庄のものにして、常食齋人として神仏を崇拜し、売トを業とし、陰陽五行吉凶禍福を説き、荒唐無稽の言をなして処々を徘徊す。ゆえにあるとき警官これを厳責し、八卦の器具を奪い路に打ち捨てたることあり。劉乾深くこれを怨む。また同庁大坑庄中心崙に林啓禎なるものあり。常に付近の竹林の竹をもって紙を製して生活す。しかるに三菱製紙会社は付近一帯の官地竹林を払い下げ製紙会社を起こすに至り、林啓禎はじめ該地の人民その影響を被り、はなはだ生活に苦しむ。これをもって二人大いに不平をいだき、日本人の圧迫を免るるは日本人を殲滅するにしかずとなし、東埔廬の国聖廟の神託に、「日本人より台湾を駆逐し王となるべし」とあり。これがためもしこれに参加せしものは功に従って栄職を授け、業を授け、賞を厚くすべし」と。衆これを聞いて参加するもの多し。そうしてまず頂林派出所を襲撃し、巡査二名巡査補一名を斬り、林圯埔支庁に向かう。途中林玉明なるもの匪群に対し、その軽挙妄動を叱責せしに、衆はじめて劉乾らに欺かれたるを覚（さと）り、山中に逃亡す。時に林圯埔支庁より警官出張し、壮丁を招集し、山地の大捜索を行い、ことごとくこれを捕縛し、事やむ。時に明治四十五年三月なり。

第十八節 黄朝および黄老鉗

嘉義蘆竹後庄に柯象なるものあり。清国時代かつて匪群に投じ、所々に剽掠を逞しうせしが、飄然として帰庄し、謠言していわく、「内山において神に逢い、神を奉じて帰れり」。その神託にいわく、「いずれ必ず死後神となる」と。その後日夜玄天上帝を祀り、家人に言いていわく、「今より三十日の間に話ながら神となると、そうして室内に糠を入れこれに火して自らこのうちに入り椅仔（いす）に座して遂に木乃伊（ミイラ）となる」（今警官練習所の参考品となりという）。しかるにこの付近の土人これを称して活き神して礼拝焼香日夜絶ゆる時なかりしなり。そうして嘉義庁大埤頭庄や黄朝および同所黄老鉗なるもの柯象が故智に倣い、菜食をなし、日夜神を奉祀して種々なる謠言をなす。あるいは神を拝せざれば火災大に至るべし、あるいは大地陥落すべしと。また神の託に我をして台湾の大王となさしめ、清国より兵一百万（明治四十五年）五月二十二日来援す。その時我ら力を盡くして日本人を掃討すべし云々と称し、多衆を集め神像を（西天宮と称する猿猴の像）舁（かつ）ぎまわって愚民を惑わす。この時張各水なるものこれを警官に密告したるをもって、巡査直ちに黄朝・黄老鉗を同行したるに黄朝は該巡査に菜刀を持って抵抗し傷を負わしめたり、これによって各関係者を嚴重に取り調べ事判明し処刑して事息（や）む。

第十九節 羅福星 ※苗栗事件の首謀者

羅福星は苗栗牛欄湖（※原文のまま。現在の南投県信義郷）のものにして三年間苗栗公学校に学びしも、明治三十九年業を卒（お）えずして一家支那広東に帰り、小学校教師となる。時あたかも支那第一革命の際にして福星もまた革命軍に投ず。そうして革命の結果は遂に四百余州を席卷し遂に漢朝三百年の大業を覆し、革命民国の基礎並びに定まる。福星これに感じ、台湾の愚民を煽動して事をなすときは、漢朝を覆すより遙かに易やすたる一業なり

となし、大正元年再び本島に渡来し台北および苗栗地方に往来し、日本が本島における施政はすべて苛政にして久しくこれに甘んぜんか、ついには家を失い、財を失い終わりに身を滅ぼすに至る。今において日本統治の域を脱せずば、影響その羈絆（束縛）を脱するあたわざるべしと謠言し、ひそかに各地に事務所を設け与党を募る。各地の愚民これに応ずるもの実に七百数十名に至る。しかるに該陰謀は事未然に発覚し、すべて検挙されたり。しかりといえども、事全島にわたり実に開台以来の大陰謀たりしものなり。

第二十節 李阿齊 ※閩帝廟事件の首謀者

李阿齊は住所不定の台湾人なり。大正二年六月頃より、台南大目降および閩帝廟（※現在の台南市閩廟区）付近を徘徊し、謠言していわく、わが父は日本人のために殺されたるをもって、その復讐をなさんと欲し、機をうかがうこと久し、目下北部土匪蜂起し、日本官憲もつばら力をこれに致し、余力なし。事を挙ぐるはこの時において他にあるべからず。今われは内山に部下数百人あり。その地は一度、種を下すときは年々自然に実り、また塩水と清水の湧出する泉坑あり。実に不可思議の霊地なり。もし入党せば髪を剃り、中央を残して認となし、このところに来たるべし云々と。これを信じて台南五甲庄の愚民十五名入党したるも事あらわれて捕に就く。

第二十一節 陳阿榮 ※南投事件の首謀者

陳阿榮は台中揀東上堡水底寮のものなり。南投地方に事を挙げ、日本人を殲滅して、日本統治を脱せんことを謀り、大正元年八月頃より、徐香ほか八十五名を勧誘入党せしめるも、事発覚して捕に就く。

第二十二節 張火炉 ※大湖事件の首謀者

張火炉は台中・下揀東下堡阿厝庄のものなり。六甲および大湖方面に反旗をひるがえし、日本人を駆逐し、政府の羈絆を脱せんと欲し、大正二年三月頃より革命党を組織し、黄炳貴ほか四十八名の黨員を募集したるもついに事発覚す。

第二十三節 頼来 ※東勢角事件の首謀者

頼来は台中・苗栗三堡圳寮庄のものにして、支那革命の当時、渡清し、満朝三百年の偉業を革命軍が易やす覆したるを見て帰台し、台湾のごとき一小島の日本人を駆逐してこれを占有するは、易やすたることなりとなし、謝石金・詹墩・謝輝等と謀議し、第一、東勢角支庁（※現在の台中市東勢区）を襲い銃器を奪い、胡詹墩（※現在の台中市豊原区）・台中の順序をもって攻撃すべしとなし、徒党を糾合せしに、これに応ずるもの八十名に及べり。そうして大正二年十二月夜、頼来・謝石金等部下を率い、二旒（※旒は旗を数える数詞）の龍旗および五色の革命旗をたて、東勢角支庁を襲撃し、巡查二名・巡查補一名を殺したるも、竹内警部補等よくこれを防ぎ、匪者頼来・副将詹墩を射殺したるより、これがため全部銃・槍・刀・旗を捨て、潰乱せり。

第二十四節 羅嗅頭 ※六甲事件の首謀者

羅嗅頭は嘉義南勢庄のものなり。拳闘術に長じかつ学力ありて少しく日本語に通ず。もともと相当の資産を有したりしも、年々衰えて昔のごとくならず。かつて人の子を強姦せしことより、店仔口支庁は彼に戒告を加えんとせしに、彼遁れて山中に隠れ、密に大坵園庄中坑、陳条榮なるものと往来し、常に神仏を奉祀し、読経祈祷に勤め、かたわら兵書を耽読し、警官の監視を避けいたるも、常に不安に耐えざるより、むしろ日本人に反抗して、これを殲滅するにしかずとなし、時に中坑の羅獅なるもの、窃盗の嫌疑にて警官搜索中なりしが、羅獅はこれを避け、弟羅陳とともに来たり、羅嗅頭方に潜む。このときにおいて同気相応じ、二人は嗅頭の股肱の部下となり、付近村落

に至り同志を糾合し十数名を得たり。大正三年五月五日、嘉義前大埔警官派出所に忍び入り、銃器弾丸を窃取したるため捜査厳密となりしより、まず付近の派出所を撃ち、そうして六甲支庁を攻めおとすべしとなし、翌八日同志十数名旗をたて六甲に向かって進む。その途中、大坵園、王爺宮警察官派出所を襲撃したるも、いずれも巡査不在なりしたため目的を達せず、なお沿道の人民雷同してついに七八十名に至る。この報に接し、六甲支庁より野田警部補、巡査五名を率い、王爺宮に向かい進行中、彼匪団の六甲に来るに会したるが、匪徒は高地の道路両側より挟撃し、かつ警官は寡にして衆に対し、地形不利なりしも、大いに力戦してついに匪徒を四散せしめたり。しかるにこの際野田警部補傷を負いて死す。のち大捜索の結果、羅嗅頭等自殺し他ことごとく捕に就く。

第二十五節 余清芳 ※西来庵事件（噍吧哖（タパニー）事件）の首謀者。

余清芳は台南後廊庄（※現在の高雄市左営区）のものにして、幼きより漢学を学び、やや日本語に通ず。一度台南庁巡査補を奉職せしも不正のことより職を解かる。のち食菜堂（※植栽とは台湾民間信仰である「齋教」を指す）に出入し、五里林庄（※現在の高雄市橋頭区）の後平会（神明会。※宗教団体組織を指す）の録事となり、また塩水港、無頼漢団、二十八宿会の秘密結社に入り党勢の拡張に力（りき）めたり。しかるに我が官憲の知るところとなり、捕らえられて台東浮浪者収容所に送致せられしが、のち赦されて帰来し、会社あるいは商店の雇員となり、あるいは自ら商業を営みたるも、多くは失敗におわれり。この失敗は官の圧迫の致すところとなし不逞の非望を抱き、官を怨むの念ますます深きを加え、再び食菜堂に出入し、台南亭仔脚西来庵に至り、同庵董事、蘇有志、鄭利記等と相謀り、名を説教に借り、人民を集め日本政府の苛政および日本人を殲滅するは易やすたる業なりとの意をもって、あるいは神勅に託し、「余は台湾の皇帝たるべきを命ぜられたり。あるいは日本は二十年を限りて台湾を棄つ神勅あり、すなわち大正四年はその期限なり。あるいはまた西来庵の信徒となり寄付金をなし、神符・神薬・香炉の灰を持するものは弾丸の中せず、あるいは支那より法術師を招聘し、被弾・避傷の術を習得せり。あるいは余に宝剣あり、抜くこと一分なれば一万の兵、二分なれば二万、三分なれば三万の敵を一挙に殺戮すべし。あるいは天帝毒雨を降らし、毒風を起こし、日本人を全滅すべし」云々と、荒唐無稽の言をなし、これがためこれを信じて金銭を寄付し、神符・神薬を受けその党に入るもの数千人の多きに及ぶ。このときにあたりて改隸当時匪徒に党し、ところどころ掠奪惨殺を逞しうし、なおいまだ山中に潜伏して捕に就かざる台南噍吧哖〔タパニー〕支庁下竹頭崎庄（※現在の嘉義県竹崎郷）の匪魁・江定、その部下とともに余清芳の党に入り、また嘉義庁他里霧街（※現在の雲林県斗南鎮）の羅俊なるもの、匪徒としてしばしば官に逮捕せられんとしてのがれて支那台湾間を往来し、多く山中に潜伏して食菜人となり仙人のごとき生活をなし、常に日本政府の圧迫を怨み、機を見て事を挙げんとする非望を抱きおりに、時あたかも余清芳の事を起こさんとするや、ただちに台南に来たりて結合し、機熟せば事を共にせんことを盟約せり。

このときにいたりて、街衢（街道）の風説まちまちにして、民心倨傲（おごりたかぶり）、在台内地人に対して不逞の挙動多かりしをもって、官憲はこれに注意し、日夜根元を捕捉せんことに腐心せり。そうして大正四年五月二十三日に至り、基隆支庁において支那に渡航せんと欲する蘇東海を捕らえて訊問し、余清芳等の陰謀を明らかにし、嘉義竹頭崎庄尖山に潜伏せる羅俊ほか三名を捕らえ、引き続き余清芳等を逮捕せんと欲し、警官二百七十名を派遣し捜索せしも、余清芳等は噍吧哖山中に潜伏し、また付近の人民これに気脈を通じ、容易に実情を知るに由なく、はなはだ困難せり。同年七月中我が電話架設隊および警官二名、噍吧哖、牛港仔の山中に至りしに、江定の率ゆる一隊、警官を射撃せるより、警官これに応射し、江定の子・江麟を殺し、匪徒は山中に遁走せり。以来昼夜を分かたず捜索を厳にせしに、七月九日に至り一群の匪徒甲仙埔支庁（※現在の高雄市甲山区）および十張犁・大坵園・阿里関・蚊仔尺・河表湖・小林的各警察官派出所を襲撃し、警部補・巡査・巡査補および家族・人民等三十四名を惨殺し、該地一帯一時全く匪徒の蹂躪するところなり、ここにおいて警官百七十名を急派し鎮圧に向かう。し

かるに余清芳の率ゆる匪群は八月二日、噍吧哖支庁南庄派出所を襲撃し、警部補・巡査・巡査補・公学校長・公医および妻・外内地人・本島人、合計二十名を惨殺し、派出所に石油を注ぎ火を点じこれを焼毀したり。この報に接したる台南歩兵第二連隊の一中隊および山砲隊は未明台南を發し、付近の土匪を掃蕩しつつ南庄に到着せり。八月五日より六日にわたり首魁余清芳および副将江定は大明慈悲国大元帥余清芳云々の旗數十旒を押したて、匪徒数千名を率い噍吧哖をへだてる一千七百八十米突の高地、虎頭山に抛り、噍吧哖支庁に向かって戦鬪を開始し、銅鑼を鳴らし、旗を振りて投到し來たる。わが警察隊は街端に堡壘を急造しこれによって防戦す。同日午後二時台南守備第二連隊黒田少佐は歩兵二個中隊および山砲一個中隊と共に來援せり。重圍に陥れる警察隊これに勢を得、突出勇奮、相呼応して進撃し、このときにおいてはじめて匪群退却するに至り、のち引き続き軍隊警察保甲民力をあわせて嚴重なる大搜索を行い、余清芳および江定その他の匪党ことごとく逮捕に就き事平らぐ。

第二十六節 揚臨

揚臨は台北新庄のものなり。前科者にして性すこぶる懶惰（らんだ）、奸惡無頼淫酒にふけり、よく他人と喧嘩口論をなし、正業に就かざるより、常に警官の戒告を受けたるより、かえってひそかに官を怨むに至る。彼おもえらく、もし機あらば警察官を殺害して恨をそそぎ、かたわらその勢いに乗じ、地方の富豪を掠奪せんとする非望を抱き、支庁に対し不平あるものまたは無頼の徒を煽動し、種々なる蜚語を用いて、与党七十名を得、大正四年中南部に暴動事件あるを聞き、まさに事を挙げんとせる際、変心者の官に密告するものありて、事遂にあらわれ、ことごとく捕に就く。